

## 青柳さんの思い出

川口 ひろ子

私が所属するモーツァルトの愛好会は、月刊誌と季刊誌を発行している。長年両方の編集長を務めた青柳省三さんが逝去された。

青柳さんの入会は一九九〇年頃だったか。バブルの熱気はまだ冷めやらず、モーツァルト没後二〇〇年を記念するオペラ公演やコンサートが頻繁に行われた嬉しい時代であった。この会は一九八二年、熱烈モーツァルティアンの若松茂生さんが立ち上げたが二年後に彼は海外へ転勤となった。編集を引きついで若手会員達も会社勤務との両立は難しく、結局最後に青柳さんの登場となった。二誌の刊行は今日迄ほぼ四〇年間続いていて会の貴重な財産となっている。特に月刊に関しては、音符による楽曲の解釈など一流の先生方の難しい講義を、簡潔な言葉で私たちに伝えてくれたのが青柳さんの報告文であった。若松さんはこの会の創立二十周年記念号で「……赤字にもならず長期間続けてこられたのはプロの編集者であった青柳氏のお陰である」と語っている。

熟達の文章を沢山残してくれた大先輩・青柳さんはお洒落のセンスも抜群だった。明るい色の烏打帽を粹にかぶって原宿の街を闊歩する姿はブラーボ！北イタリアの街口ベレートへの団体旅行も忘れられない。町興しの為の音楽祭に参加して、彼の地の同好の士と親睦を深める旅だ。翌日の訪問先によりツアーコンダクターがドレスコードを発表、スーツ、ジャケット程度、ポロシャツのどれかの着用を奨められる。大邸宅に招かれた日にロビーに集合した男性会員のピシッと決めた姿は目を見張るばかり。特に恰幅の良い青柳さんのイタリア人顔負けのスーツ姿は見事であった。

海外の名門歌劇場も続々と来日して極上の舞台を披露してくれたあの頃、私たちはイタリアの他にも蓼科や山中湖の拘りのペンションに繰り出して、沢山のモーツァルトを聴き思う存分語り合った。

青柳さんは逝ってしまい、コロナ禍で鬱々とした毎日が続く。あの頃の華やきは夢か幻かと思えてくる昨今だ。